



包囲された 日本 石川達三

仙印進駐誌

包囲された日本

仏印進駐誌

石川達三

集英社

包囲された日本——仏印進駐誌

一九七九年一月一五日 初版発行
一九七九年二月二五日 二版発行

著 者 石川達三

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五一〇
電話 二三〇一六三六一(出版部)
二三八一二七八一(販売部)

印刷所 大文堂印刷株式会社

検印随止。乱丁、落丁本はお取り替えます。

© T. Ishikawa Printed in Japan, 1979
0095-772178-3041

定価 九八〇円

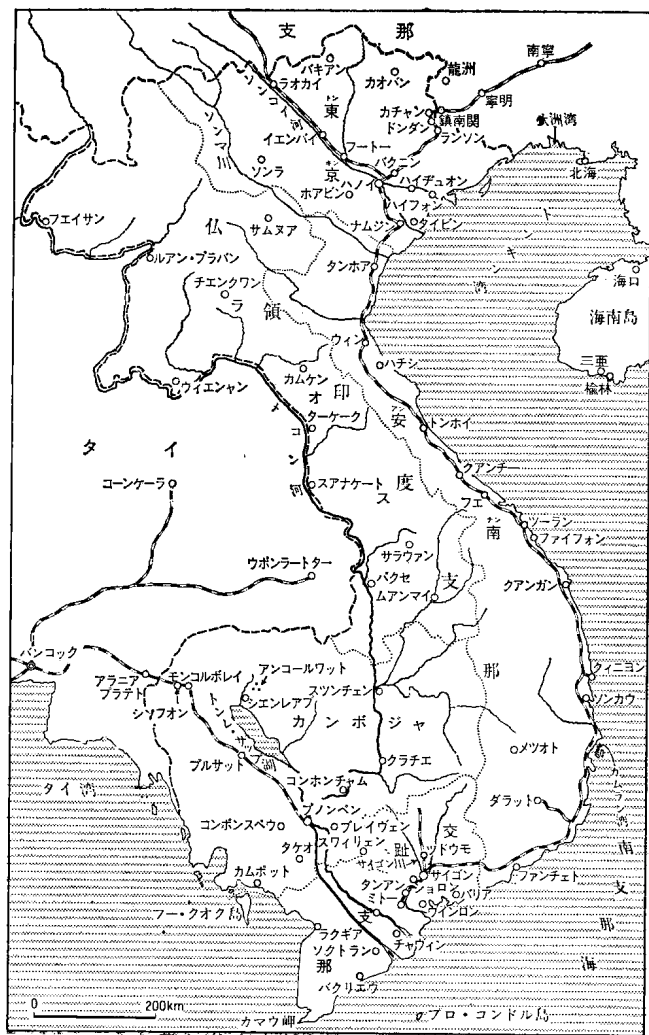
石川達三 * 包囲された日本 * 目次

第六章	第五章	第四章	第三章	第二章	第一章	前記
117	100	78	51	29	11	7

第十二章	第十一章	第十章	第九章	第八章	第七章
244	223	208	182	153	136

インドシナ半島のヴェトナム、ラオス、カンボジャ等は太平洋戦争の終了まではフランス領であり、日本ではこれを仏領印度支那、略して「仏印」と称していた。本稿に於てはこの略称を用いている。また、支那（現在の中国）、満洲（現在の中国の東北地方）、日支事変、大東亜共栄圏など当時行われていた呼称も、ここではそのまま使用する。

包囲された日本——仏印進駐誌



前記

昭和十六年十二月、太平洋戦争開始の直後、私は海軍の徴用を受けて報道部の所屬となった。翌一月初旬台湾、海南島を経てサイゴンに赴き、報道部長堀内大佐の指揮下に入った。私と同時に海軍徴用を受けた約二十五人は、全部が新聞記者、報道写真家などであって、作家は私だけであった。

新聞記者は徴用報道班員でありながら同時に新聞記者であり、現地の新聞社支局と常時連絡をとりながら、報道記事を書き検閲を受け、支局の無電で内地の本社に記事を送っていた。自動車もあり宿舍もあった。

新聞社支局という足場を持たない単独の私は、支局の好意で宿舍に寝泊りし、車に便乗し、郵便を内地に送ってもらう有様であった。報道記事も二三度は書いたが、記者諸君のような活発な活動はできるはずもなかった。

そこで私は報道活動一切をやめて、記者とは全く違う分野で仕事をして見ようと考え、報道部長の諒解をもらった。私は日本軍の仏印進駐という事実が、これが太平洋戦争の大きな基盤となるものであると見た。且つまた、仏印進駐にはその当時の世界情勢がことごとく反映している。これを理解す

ることによって、良きにつけ悪しきにつけ、当時の日本という国の生き方を殆んど完全に理解できるのではないかと思った。

爾来五ヶ月あまり、私は進駐当時の事情を直接取材した新聞記者、直接責任の地位に在った陸海軍人、外交官等々を、直接に訪問し、談話を聞き、ノートを取り、また資料をしらべ、現地調査をして廻った。地域はハノイ、サイゴン、シンガポール、ペナンにわたり、直接談話を聞いた人も二十人以上に及んだ。

その資料の中には軍事機密もあり外交上の機密もあり、たといまとめて仏印進駐誌を私が書いても、あの戦時下で発表できるものではなかった。しかし私が書いておかなくては消えてしまうような事実もある。私は発表できないことを承知で、帰国後の約一年の日子を費して、十八年の五月に、五七二枚の原稿を書きあげた。今から読み返してみると、その当時の社会の風潮を反映し、特高警察の検閲をも考慮したかのような文章が少くないが、改めて書き直すようなことはできるだけしないことにした。三十五年も前の文章であるから、ちぐはぐな印象を与えるような字句も少くないが、それは右のような事情である。

いまさらこのような記録を発表することにどれだけの意味があるのか。その事も私は考えてみた。今日の浮薄な世相から見れば、或いは無くもがなの出版物であるかも知れない。太平洋戦争への悪評は無数に有るけれども、戦争が敗北に終わった事と、戦わなければならなかった必然性とは、問題が別である。私はやはり、あの当時の日本の歴史的な苦悩と世界の情勢とを考えて見る上から、刊行物としてこれを残して置きたいと思った。当時の日本を知ることによって、現在の日本への反省が得られるかも知れないのだ。

多くの人たちから資料の提供を受け、指針を与えられたが、古い事とて大概は忘れてしまった。サ
イゴン報道部長堀内大佐以下、数人の海軍将校たち、箕田総領事、松岡中尉、新聞通信社の記者た
ち、前田君、横田君、中山君。それから北部進駐については故大屋君の手記の一部を引用させて貰っ
た。その中の半数はもはや故人となった。ここに記して篤く御礼を申して置きたい。

昭和五十三年十一月

著者

第一章

支那事変はその発端からして（終りなき戦い）の様相を示していた。これを拡大して行けばどこまでひろがるか計り知れない不気味なものがあつた。南京陥落の直後に蔣介石は駐支ドイツ大使トラウトマンの和平交渉を一蹴して更に焦土抗戦を宣言した。日本はこのときになってはじめて自分がおちこんだ罅し穴の本当の深さを知つたのであつた。近衛首相は絶望的な決意をもつて（蔣政權を相手にせず）と声明した。漢口政府のうしろには英国とフランスとが居り、上海、香港、仏印をへて大きな援蔣物資が送られていた。しかしながら日本はまだ英米を相手にして戦うだけの準備はできていなかった。打倒英国を叫ぶ群衆の行列が宮城をとりまいて歓声をあげているのに、上海の英租界にはなお一指をもそめることができず、そこには抗日テロリストが白昼を横行していた。

昭和十二年（一九三七年）支那事変がはじまつた直後、ルーズベルトは千二百名の陸戦隊を上海に派遣した。しかし当時の米国は蔣介石をたすけて事変を拡大する意志はなかつたようである。この年九月十四日ルーズベルトは中立法の規定にしたがつて米国船舶による日支両国むけ武器の輸出禁止を声明し、中立の態度を保持しようとしていた。そして日本の汽船は米国の港から屑鉄を買い、石油を

買うことができた。米国が対日強硬政策をとって英国と合流するようになったのは昭和十四年以後のこと、それまでは歐洲において英独の間を斡旋し、東洋では支那事変不拡大を希望していた。

世界情勢のこういう危局にあたってフランスは何をしていたであらうか。いまやフランスは列強に伍して二歩も三歩も立ちおくれていた。かつて世界一を誇った空軍もいまは三流におち、その他の軍備も不完全なものであった。この不完全を掩わんとするものがマジノ・ラインであった。

フランスは日本に対して決して友好的ではなかった。日英関係の悪化はすなわち日仏関係の悪化である。フランスはその外交において英国の属国のようにさえもあった。満洲事変も支那事変もフランスにとってはさほど大きな問題ではなかった。むしろ英国から送られる援蔣物資を陸あげし運搬することによって仏領印度支那にはすばらしい好景気がおとずれていた。フランスが日本の強大化と南進とはじめて戦慄を感じたのは昭和十四年（一九三九年）二月十日、日本軍の海南島上陸であった。一八九七年にフランスは支那との間に海南島不割譲条約をむすんでいる。この島の占領によって雷州半島と広州湾とにある仏国の勢力は、完全に外から封鎖された形であった。

フランスはまず大急ぎで英国と協議したのち、駐日アンリ大使をもって有田外務大臣に説明を求めてきた。外相は、「南支封鎖を嚴重ならしめ、蔣政権の壊滅を速かならしめる為の軍事上の目的に出でたものであって、軍事的必要以外のものではなく、領土的野心はない」と答えた。クレギー英大使、グルー米大使も同じ質問を提出しおなじ回答をあたえられた。

海南島を日本の手にゆだねた事は南支那海における日本海軍の勢力伸長をゆるしたものであり、仏領印度支那はその死活に関する要地を敵手にあたえたことであった。仏印の運命はこのときを境として急転した。そして日本軍にとっては仏印進駐の大きな作戦基地を得たことでもあった。

海南島作戦は日本が支那大陸内部の戦いに一段落をつけていよいよ外劃の作戦にはいったことを物語っている。外劃作戦とは援蔣路の遮断である。広東占領はその第一段として武漢包囲戦と並行して行われた。かくて香港から支那奥地にはいる輸送路は遮断された。第二段は海南島であり第三段は南寧作戦である。そして北部仏印進駐は第四段の外劃作戦であった。――

しかしながらこうした援蔣物資封鎖作戦の将来に、支那事変終結の希望があったかどうか。四川省はその一省をもつて一独立国を建てることができると言われていたものである。日本軍の最高首脳部は何を目ざして次第に南下して行ったものであろうか。支那事変は終りなき戦いであり、支那にかわって次第に大きくうかび上ってきたものは英国と、その同盟国としての米国であった。

日本の南下して行こうとする地域には英米仏蘭の領土と權益とが充分にかたい地盤をつくり、日本に対して共同戦線を張っていた。この包囲陣形にふれることなしに日本は軍艦一隻をも動かすことはできない。開戦準備は完璧でなくてはならない。

その準備は完成しつつあった。一方で支那事変を戦いながら、戦時予算の幾十パーセントをもつて次に来るべき大戦争のためにあらゆる準備をととのえつつあった。重油とガソリンとの龐大なストックもできた。横須賀や佐世保の港では山の中に巨大な貯油タンクがいくつもできていて、直接にパイプを軍艦につないで給油する設備もあった。重工業統制、綿布食糧統制、金属使用制限もできた。国民生活を犠牲にして、民衆の困苦のうえに戦争準備がすすめられて行った。国産飛行機は充分に英米のそれと戦い得るだけのものが、しかも相当多量に生産される予定であった。潜水艦は優秀で魚雷は世界一である。そして艦砲の命中率は世界の驚異である。千島、北海道から台湾まで、あらゆる基地の整備にも着手した。

ここに記憶されなければならないことが二つある。その一つは嘗て日本のワシントン軍縮會議代表が主力艦五・五・三の比率を承諾するときに、その代償条件として太平洋上の英米基地の現状維持を承認させたことである。したがって昭和十一年の末まで英米は香港、フィリピン、グアム、ミッドウェー等々の基地を強化整備することができなかった。この立遅れは大東亜戦争の最初における英米の重大な敗因をつくっている。この規定の範囲からシンガポールだけは僅かにはずれていた。英国がシンガポール建設に主力をそそいだのはその為であった。

いま一つは南洋委任統治領である。ヴェルサイユ講和會議に派遣された日本代表は、旧ドイツ領の南洋群島の統治を日本に委任すべきことを主張して譲らなかつたのである。赤道海上にあるこれらの島々は、ハワイとフィリピンとを劃然と二つに分けている。日本の勢力がここにあれば比島の戰略的価値は半減され、逆にこの島々がもし米国の手にあるとすれば日本の太平洋防備はほとんど不可能に帰する。日本にとっては失うべからざる南の生命線であり、比島にとっては死命を制せられる場所であった。

従つて日本海軍は國際連盟脱退の二日前に、南洋群島の主權は日本にありと聲明を發し、ワシントン條約廢棄のころからは、委任統治領に対する國際規約を無視して群島に海軍基地を整備しつつあった。したがってグアムは開戦前から軍事的には無価値なものにされていた。

海南島占領は日本の實力がある程度強化されたことの証拠であつた。フランスの抗議にあうことは承知のうえで強行し、相手の出方を見ろというだけの確信ある行動であつた。歐洲はドイツとイタリヤをめぐつてもはや発火点に近づきつつある。海南島占領によつて英仏は日本と戦うことは極力避け